

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会・会報

2006年8月25日

32号

発行者 平形 義人
発行所 ぐんま日独協会

〒377-0007

渋川市石原町966 母心堂平形眼科

☎0279-22-0149 Fax0279-24-6867



総会出席のメンバー

(群馬県昭和庁舎にて 小林和男氏撮影)

■ハイマート32号	目次	頁
☆ ぐんま日独協会総会	1
☆ 平形義人会長挨拶	2
☆ 18年ぐんま日独協会資料	3
☆ 17年12月クリスマス会	4
☆ ブレーメン日独協会に出席して	5
☆ フュッセン市訪問の旅	6~10
☆ ベーテルから愛を込めて	11
☆ 全国日独協会年次総会草津開催案内	12
☆ ドイツフェスティバル寄附者案内	12
☆ その他	12



平形会長から記念品を受けとるマリア黒沢さんとクラウディア蝶谷さん

R100

PRINTED WITH
SOY INK

題字：平形 義人 写真：澤井 祐輔

ぐんま日独協会のドイツ年

ぐんま日独協会 会長 平形 義人

日本は徳川時代の長い鎖国政策の中にも、長崎出島に於けるシーボルト先生が蘭医としてドイツ医学を齎らしてくれた。その高弟として有名な高野長英は蘭医としての逃避行の際中に群馬県吾妻に潜入した。渋川市の郷学の祖の一人木暮賢樹は大いに啓発されたことが足利市柏瀬眼科の宗尹翁の碑や長英に贈られた地球儀と万国地図に遺されている。明治9年に来日されたE. V. ベルツ先生は明治11年には『日本鉱泉論』を著わし、伊香保温泉（標高800米）や草津温泉（標高1100米）を広く世界に知らしめてくれた。ベルツ先生はカールスバード以上の温泉地とし、理想的な飲料水と温泉に恵まれた保養地案を示したが明治29年9月の草津村の議会の反対の為にその後七年草津に向かなかった。明治38年6月、在日29年で花夫人と子供を入籍し帰国され、大正二年64才で大動脈瘤の為亡くなりました。東大の三沢敬義博士や、群馬の白倉卓夫教授に研究は引き継がれました。白倉教授は在独中ビペラッハに住まわれ、エッスレ観光列車を復興されたり、ゲーテも読んだという“ビペラッハ全集”を群馬大学に贈呈されたりぐんま日独会員として活躍され感激の至である。

ドイツ医学は森鷗外等の活躍に依って西洋文化が奔流の様に入流し、見事に西洋文明に開化された日本は立憲君主国の完成を急ぎ、日清、日露の戦も臥薪嘗胆の相言葉で勝ち抜き、第一次世界大戦には日英同盟の誼によって『青島』を占領した

が『バルトの楽園』の映画にある様に、又Botschafter a.D.D.Uwe Kaestnerが開会式に臨席した津田沼の“習志野のドイツ捕虜君収容所（所長は西郷隆盛の長男西郷寅太郎大佐-ハイマート21号参照）”例にある様に、昨日の「敵」は今日の「友」の乃木大将のステッセル將軍を遇した“和を以って尊しとす”聖徳太子の憲法に培われた大和心、国民性に依るものである。

2000年の“ドイツに於ける日本年”は新しい21世紀に於ける日独の新しい出会いを求め、800以上のドイツ全土にての催の報告を草津大会に於て黒川剛事務総長の講演（ハイマート24号）を受けました。樋口廣太郎日独協会会長を主としデュッセルドルフ河畔の盛大な花火大会で幕を閉じた由ですが、当地の藤本修事務総長等の感激はさこそであったと思います。

2005/6年の日本におけるドイツ年は、シュミエグロ大使がハイマート前号に示した様にぐんま日独に親しく開会式に御臨席下され、その数日後の全国会長会議に詳しく報告を頂き、大変な御喜びであったことだけでも感謝感激で一杯です。

大使は本年六月を以って退官されました。新大使は七月に信任されたHans-Joachim Daerr大使は大変日本通の方と申されます。

以上



小淵優子衆議院議員と並ぶ平形会長（ドイツフェスティバルにて）

18年ぐんま日独協会総会報告

平成18年4月20日、昭和庁舎にてぐんま日独協会の総会が開催されました。

ぐんま日独協会
平成17年(2005年)事業実績報告書
まとも 事務局長 鈴木克典

平成17年 1月(土) (財)日独協会・全国日独協会連合会総会 平野会長出席
1月27日(水) 役員会・・・ドイツ年事業について・・・
2月22日(土) 全国日独協会連合会(平野会長) 平野会長、群馬協会長、鈴木出席
2月23-24日 日独パートナー会議(宇都宮市及び定例)
2月24日(金) パートナー会議出席のドイツ人約90名 来賓歓迎
・・・春日 伊勢原議長 第一回記念式典・・・
2月26日(土) ドイツ領事館、少年山崎の記念講演会(群馬大学会館)
4月 4日 東京国立博物館にて「日本におけるドイツ製オートバイ」
4月18日(日) C&M日独協会 講演会(アリスホテル16 ぐんま)
7月12日-18日 イベント「ドイツ・アリスホテル16 ぐんま」
講演 群馬県庁 県民ホール 群馬広場
参加者数 累計4,900名
会 2月1日付のアンケート結果を基に、ドイツ・ローゲンドイツ大学、
群馬県庁、群馬大学等にも参加され、拡大が行われた。
8月 10日(土) ドイツ・アリスホテル16 ぐんま 長夏打ち上げ会 50名参加
8月20日 平野会長、千葉日独協会のドイツ・アリスホテルに出席
10月16日(日) 群馬県国際交流まつりに参加 22名
10月20日-22日 海外ドイツ展(群馬アリスホテル)3名参加
群馬県アリスホテル協会の会報にも掲載、交換
11月10日 東京ドイツ領事館に「ドイツ大使館」平野会長出席参加
11月14-15日 群馬県職員、若手日独協会のドイツ・アリスホテルに出席
12月 ハイマート3-1号 発行
12月 4日(日) C&M日独 アリスホテル 52名
平成18年 3月22日(水) 役員会
4月20日(水) C&M日独協会 総会

◎ フェスティバル終了後、ドイツ領事館のホールにも、次の15名で開いた。
1 福井博 2 中込友樹 3 森下下川田法正 4 高橋高基(アリス)
5 伊勢原彰 6 地味建設労止活動推進センター 7 沢村京 8 高橋有
9 伊勢原彰 10 地味建設 11 年代印刷 12 群馬県国際交流協会 13 群馬大学
14 藤之木子夫 15 太郎新聞印刷

以上

平成17年(2005年)ぐんま日独協会決算報告
ぐんま日独協会・平野会長出席・・・平成17年1月1日-12月31日
会計期間 収入1,318,055円(消費税1,141,923円)
一増減額1,724,177 ぐんま日独協会 鈴木克典

◎ 収入の部

種別	17年度実績	17年度目標	差額
総協会	178,894	188,500	9
会費	388,000	390,000	-1,999
合計	566,894	578,500	-11,606
収入	228,000(18,000(12))	228,000(18,000(12))	0
差金	16,000(100(22))	16,000(100(22))	-6,000
支出	212,000(18,000(22))	212,000(18,000(22))	0
事業費	431,134	385,000	-46,134
ドイツ・アリスホテル	18,228	ドイツ 388,000	
群馬県庁・アリス	34,252		
ドイツ領事館	83,508		
国際交流まつり	83,458	国際交流まつり 38,000	
アリスホテル	196,000	アリスホテル238,000	
総協会	28,789		
寄付金・税金	127,729	200,000	-72,271
合計	1,318,055	1,439,999	-121,944

◎ 支出の部

種別	17年度実績	17年度目標	差額
事業費	401,209	390,000	-11,209
総協会・税金	22,118	28,000	-5,882
ドイツ領事館	253,925	300,000	-46,075
国際交流まつり	83,976	88,000	-4,024
アリスホテル	216,258	200,000	16,258
ドイツ領事館	28,000	28,000	0
会議費	600	18,000	-17,400
通信費	178,258	180,000	-1,742
事務費	24,288	18,000	-6,288
印刷費	200,550	600,000	-399,450
雑費	0	0	0
出張交通費	28,228	100,000	-71,772
交通費	82,129	0	82,129
旅費・宿泊料	8,000	12,000	-4,000
寄付金・下書き	38,851	12,800	26,051
合計	1,141,923	1,439,999	-297,876

上記の数値及び会計簿等すべて確認しました。平成18年 月 日 監査 高橋とん子

ぐんま日独協会
平成18年(2006年)事業計画書
まとも 事務局長 鈴木克典

平成18年3月22日(水) 役員会
4月17日(土) 全国日独協会総会
4月22日(水) ぐんま日独協会 総会

講演会
4月 ハイマート3-2号 発行
3月 賞状会 ドイツ音楽の夕べ
10月 群馬県国際交流まつり
12月 C&M日独 アリスホテル
12月 ハイマート3-2号 発行

平成18年3月 冬例会
4月ごろ 全国日独協会・・・全国総会・・・
群馬県で実施を検討中

以上

平成18年(2006年)ぐんま日独協会予算(案)
・・・平成18年1月1日-12月31日・・・

◎ 収入の部

種別	18年度予算	17年度実績	差額
総協会	178,724	188,500	-9,776
会費	388,000	390,000	-1,999
合計	566,724	578,500	-11,776
収入	228,000(18,000(12))	228,000(18,000(12))	-6,000
差金	16,000(100(22))	16,000(100(22))	-6,000
支出	138,000(18,000(12))	228,000(18,000(22))	-90,000
事業費	431,000	421,134	-9,866
税金	25,000	78,789	-53,789
賞状会(ドイツ音楽の夕べ)	200,000	0	200,000
国際交流まつり(群馬県)	38,000	83,458	-45,458
アリスホテル	200,000	196,000	4,000
その他	0	111,884	-111,884
寄付金・税金	158,000	127,729	30,271
合計	1,221,724	1,318,055	-96,331

◎ 支出の部

種別	18年度予算	17年度実績	差額
事業費	385,000	385,000	0
税金	28,000	28,118	-118
賞状会(ドイツ音楽の夕べ)	253,925	253,925	0
国際交流まつり	88,000	83,976	4,024
アリスホテル	216,258	216,258	0
会議費	18,000	600	17,400
通信費	180,000	178,258	1,742
事務費	18,000	24,288	-6,288
印刷費	600,000	200,550	399,450
雑費	0	0	0
出張交通費	88,000	28,228	59,772
交通費	0	82,129	-82,129
旅費・宿泊料	12,000	8,000	4,000
寄付金	12,800	38,851	-26,051
予算外	11,724	0	11,724
合計	1,221,724	1,141,923	-79,799



講演する小林忍氏(上毛新聞論説委員長)



佐藤進一特別顧問に記念品を謹呈

独日協会総会〔ブレーメン〕に出席して

事務局長 鈴木 克彬

私共夫妻は、今春5月17日から15泊17日の日程で、ドイツ5都市を訪問し、その間独日協会の総会に出席するとともに、各地で独日協会の方々と親交を深めて参りました。また、その間の移動は、すべてDB〔ドイツバーン〕のジャーマンレールバスを使用し、乗り放題の鉄道の旅を堪能して来ました。

◎オスナブルック

最初の訪問地は、オスナブルックです。当市は、昨年のドイツフェスティバルの際の環境ポスター25枚を制作担当したECOS社の所在地で、ハノーバーの西約100kmにあります。往路、国内便乗り継ぎのため利用したフランクフルト空港では、その広さとW杯サッカーの直前だったため、警備チェックが厳しく、約一時間のタイムを要しました。

訪問したオスナブルックの街は、静かな古い街並みで、日本人をはじめ、東洋人は、殆んど見かけませんでした。

◎シュツウツガルト

オスナブルックからシュツウツガルトへのDBは、ハノーバー乗換えで共にICE〔ドイツの新幹線〕を利用したのですが、列車が30分以上遅れ、到着駅で待つ友人に迷惑をかけてしまいました。洩れ聞くところによると、最近のDBはよく遅れるとのこと、ドイツ新幹線への信頼感が高かっただけに、不思議な感を抱きました。

シュツウツガルトは、昨年秋、来日され、前橋市フォークダンス協会と交歓会を行った踊りのグループ15名「エイ」のホームグラウンドです。今般私共二人の訪問に対し、多くの方が集まってくださり、夜12時頃まで踊りの輪が広がりました。

翌日、シュツウツガルトにあるベンツ社のミュージアムに案内されました。博物館は広いだけでなく、内容が豊富で、農耕機、トラック、乗用車と開発していったベンツ社の苦難の歴史が紹介され、短時間で成長した日本の自動車業界との比較に深い思いを感じました。

◎フランクフルト

フランクフルトでは、ステアー全国独日協会副会長ご夫妻にお世話になりました。インターコンチネンタルホテルに宿泊し、丁度、旬のホワイトアスパラカス料理をご馳走になり

ました。そのおいしかったこと…。また、トラム〔市電〕で郊外の森を訪ね、ドイツ人が愛好する“森の散策”を体験しました。

◎ブレーメン

独日協会の総会が行われたブレーメンは、ブレーメンの音楽隊で有名な北ドイツの古くからの商業都市です。今日もブレーメンの港からは、BMW・ベンツ・フォルクスワーゲン等の自動車輸出され、その発展振りが確認できました。

総会には、約100名の独日協会の役員方が参加され、故プロックドルフ会長の後任人事や会費負担金の案件が討議されていました。日本からは、木村敬三元駐独日本大使をはじめ、ぐんま日独の対馬副会長等9名の方が参加されました。

日本からは、来年の春の草津温泉で行われる全国日独協会総会の案内を、木村元大使の応援も受け、おこなって来ました。特に今回は、小寺群馬県知事、中澤草津町長からの歓迎メッセージをお預かりしたため、独日協会47支部の方々にお渡ししました。

尚、ブレーメンには、回転ずしのお店があり、案外おいしいお寿司を現地で食べてきました。ドイツの方のお話によると、ドイツでは現在“すしブーム”で、フランクフルトで約100軒、ベルリンでは約200軒のすし店があり現地の評判は上々とのこと…

◎ベルリン

首都ベルリンでは3泊。宿は独日協会理事のシュルツ・溝延さんのお宅にお世話になりました。溝延さんはドクターで、社会福祉的なお仕事を中心に、ベルリンでは地域社会の尊敬を受けている方とお見受けしました。またここでは、幸いにもベルリンオペラの椿姫を見る機会があり、本場のオペラとオペラ劇場を知ることが出来ました。

◎結び

今回の訪問で感じたことは、独日協会の方々をはじめ、一般の多くのドイツ人は、日本及び日本人に対し好意的で、私達は、古くからドイツとの親交を深めてこられた日本の先輩方のご努力のお陰と改めて確認の思いを深くした15日間でした。

以上

北ドイツに魅せられて～GSEプログラム報告

…国際ロータリー財団の派遣・研修に参加して…

ぐんま日独協会 会員 宮川 清吾(群馬県中部県民局地域政策部政策室主幹)

6月6日から7月7日までの約5週間、国際ロータリー財団が実施しているGSEプログラムでハンブルグ地区及びシュレースヴィッヒ・ホルシュタイン州に派遣され、研修を行ってきました。

GSEとはGroup Study Exchangeの略で、お互いの地区から派遣された若手職業人のグループがそれぞれの地区でホームステイをしながら職業研修、文化体験、親睦活動など、幅広い異文化体験を通して全人的な発展を目指して行われるものです。

かねてからドイツの文化・芸術に親しんでいた私にとって、この研修は本当に実のある思い出深いものとなりました。州政府や市役所等での職業研修は決して楽なものではありませんでしたが、たくさんの方々の親切なドイツ人公務員との交流をすることができましたし、美しく広がる自然と歴史文化に満ち

た都市の魅力が私に与えてくれた北ドイツの印象は圧倒的でした。そして、8つのホストファミリーとの親密な交流は、私に生涯忘れられない深く強い印象を残してくれました。当初、北ドイツ人は内気で取つきにくいと聞いていましたが、皆さんはとても親切で、しかも、真剣に私達に對峙してくれ、暖かい人間関係を築くことができました。最後に開催されたお別れ会では涙が止まらなかったほどです。

Verweile doch, du bist so schön!/(時よ)とまれ、君はあまりに美しい!

このお別れ会の際、何度も思い出されたのが、このゲーテのファウストの一説です。北ドイツで経験することのできたこの5週間の思い出、本当に私の宝物になりました。大事にしていきたいと思っています。

フュッセン市訪問の旅

(沼田市・フュッセン市姉妹都市提携10周年記念)

沼田市 川田 正彦

2005年春から2006年春にかけての一年は、「日本におけるドイツ年」である。この特別な年に、私は幸運にもドイツを訪れることができた。「ハイマート31号」(2005年12月4日発行)に記したように、本年は沼田市とドイツ・バイエルン州フュッセン市との国際姉妹都市提携10周年にあたる。私も「市民交流団」のひとりとして参加の機会を与えていただき、8月17日に開催された沼田市中央公民館での結団式に臨んだ。ドイツへの初めての旅立ちに加え、使節団として、市民交流というある意味での責任の重さを感じながらも、まだ見ぬ国への期待を抱きながら、心は既に遠くドイツにとんでいた。沼田市国際交流協会主催の、「ドイツ教養講座」・「ドイツ語講座」に参加するなど、諸々の準備で出発までの1カ月間は、あっという間に過ぎていった。この旅について日を追って記してみた。

◆10月15日(土) 沼田～成田～フランクフルト

早朝ではあったが、沼田市役所に集合した交流団員の顔には、出発までの準備の苦勞をねぎらいこれからの旅に期待を寄せる温かな表情があった。出発式の後、午前6時、バスで出発した。関越自動車道から都内、湾岸道路を経て成田空港へ到着した。空港でフライトの手続き、日本円のユーロへの交換などを行い、午後1時、JL407便で日本を出发した。機内はドイツ・オーストリアのパンフを見る人、新聞や雑誌を読む人、談笑する人など様々であった。いつ頃か機内食のサービスが始まり、それぞれの方がビールやワインを注文し、食事をとりながらいろんな話をしてしたが、やがてほとんどの方が眠りについた。

12時間の空の旅、ようやくフランクフルト空港に到着した。入国審査を経て、待機中のバスで、ドイツで最初の宿泊地、「アラベラ・シェラトン・コンGRESS・ホテル」へ向かった。現地通訳のゆかりマルクスさん・中村さんの二人が紹介され、私たちは安心してホテルに着いた。各自、部屋割りに従いドイツの第一夜を迎えた。私は、機内で眠ってしまっていたためか、なかなか寝付かれず、明日からの無事を祈って、同室の星川嘉一郎さんと乾杯したりして、眠りについたのはかなり遅かった。

◆10月16日(日) フランクフルト～ハイデルベルグ～ローテンブルグ

午前6時に起床し、朝食を済ませて、8時にホテルを出発した。フランクフルト市内は、街全体が歴史博物館といった感じで、石を素材とした半円形の構造になっている窓・橋などの変化に富む建築物に心を引かれた。次々と石の建造物が予想をはるかに超えるものすごい迫力で目前にせまってきた。車窓からは、カメラのシャッターの音がとぎれなかった。

ドイツには、自然と歴史が見事に残されている。色のやわらかさが建物の壁や屋根など、多くの物に見られる。屋根瓦や石壁の一枚一枚に、微妙な色の変化を見せており、自然との調和が図られているかのようだった。説明によると、ドイツには、100年も前から、古都保存と景観保護の条例が設けられており、現在でもそれが継続され、その条例はそれぞれの町によって異なり、その規制は微細にわたっているようだった。

フランクフルト市内をバスで廻った後、次の目的地ハイデルベルグへ向かった。通りの過ぎる町並みの各家々の窓辺には、きれいな花が飾られており、窓の内側には白いレースカーテンが見られた。ドイツでは毎年、美しい町並みを対象にしたコンテストが行われているということだが、各家庭で窓辺に丹精した花を飾り、旅人の目を楽しませ、安らぎを与えてくれる現実に触れ、日本でもこうありたいものだと思った。

バスは、制限速度がなく無料の高速道路・アウトバーンを走った。日曜日の朝なので、家族連れの車が多く、時速120～130kmで走っている私たちのバスをいとも簡単にボルシェヤベンツが追い越していく。9時半頃、ハイデルベルグに到着した。

ハイデルベルグ市は、オーデンの森からライン平野にネッカー川が流れ出る景勝地にある古都で、人口が13万、1386年に創設されたというドイツ最古のハイデルベルグ大学があり、現在でも2万人以上の大学生がいる学生の町ということだ。この市には年間300万人以上の観光客が訪れているという。町を見守るように山の中腹にたたずむ「ハイデルベルグ城」を訪れた。バルコニーからの町の眺めが素晴らしく、ネッカー川に架かるブリュッケ橋が周囲の紅葉と自然に調和し、思わずシャッターを切った。城の歴史を聞いた後、地下にあるワイン用の容量22万ℓという大樽を見学した。説明を聞いて、この城が、度重なる増改築を受け、様々な様式が複合する見事な建築物として出来上がり、保存されているということに強く心を動かされた。

見学後、市内での昼食となり、食前にビールとワインで乾杯した。ドイツといえばやはりビール、ピルスナーというドイツ各地で生産されているというビールを注文した。日本のビールと幾分違い、ホップの苦味の心地よさが感じられた。

バスはネッカー川沿いに走った。対岸にはいくつかの城がありそれらが時々目に入ってきた。これらの城は、1000～1300年代に構築されたようで、戦いの中で崩壊したり、廃墟となったりしてきて、後世になりそれぞれが復元されたようだ。維持費がかさむので、現在では、個人の所有物になったり、ホテルになったりしながら、当時の面影のまま保存されているという。途中、何カ所もゆるやかな傾斜地にたくさんのブドウ畑が広がっているのを見ながら、2日目の宿泊地、ローテンブルグへ向けて進んでいった。

やがて城壁に囲まれて中世の面影を残すローテンブルグに到着した。城門を二つほど通り抜けた町の中ほどにある中世そのものの建物、「ホテル・ティルマン・リーメンシュナイダー」が、私たちの泊まるホテルであった。一息入れる暇もなく、三々五々、中世の面影を残す石畳の町へ散歩に出かけた。

町は、2kmにも及ぶ古い城壁に囲まれていた。所々に見張り用の塔が建ち、塔と塔を結んでいる城壁には屋根がかかっており、城壁の上は歩くことができた。その外側には、50メートルほどの深谷をもつダウパー川が流れ、町の中の建物は、すべて切り妻の傾斜の強い屋根で、石を主体とした構造となっていて、5～6階建てのものが多く見られた。窓は木枠でできており、そこにはきれいな花が飾られていた。ゴシック風、ルネサンス風、バロック風などのそれぞれの建築様式をうまく調和・融合させてつくられているとのことであり、正に素晴らしい景観であった。町の真ん中には、その代表的な建物として市庁舎があり、そこ広場は、マルクト広場と呼ばれ、様々な歴史的な出来事が繰り広げられてきた場所のようだ。

魚（マス）料理の夕食と、ローテンブルグ名物のお菓子「シュネーバル（雪のボール）」をいただいた後、交流団全員でフュッセン市での歓迎会で合唱する予定になっている「野ばら」「別れ」の二曲を、仮名をふった独語で練習し、11時半頃床についた。今日はドイツでの充実した一日となり、全員の顔が輝いていた。

◆10月17日(月) ローテンブルグ～ディンケルスビュール～アウグスブルグ～フュッセン

午前5時に起床し、同室の星川嘉一郎さんといっしょに朝の散歩に出かけた。外はまだ暗く冷気が頬や耳をさした。商店街のところでは、店はしまっているものの、窓ガラス越しにウインドショッピングができるように、照明で商品が照らし出されていた。建物も夜空に浮き上がって見えるように、路上からの照明で照らし出されており、石の造形が何ともいぬ情緒をかもし出していた。晴れ渡った空に、冬のオリオン・北斗七星がまばゆいばかりに輝いて見え、異国での景観と中世そのものを見せつけられたある種の感動から、興奮冷めやらぬ思いで、日本では味わえないロマンチックな気分浸った。

朝食後、ホテルを午前8時に出発した。ドイツにはたくさんの街道があるが、私たちは今回、主としてロマンチック街道を訪ねている。この街道は、ヴェルツブルクを起点にしてローテンブルグ・ディンケルスビュール・アウグスブルグなどをはじめとして、いくつもの町を通り、アルプスの麓の町フュッセンまでの、城壁に囲まれた赤屋根の町、のどかな田園風景、山麓の朝霧に浮かび上がる白亜の城など、中世そのままの世界に迷い込んでしまいそうな光景をもつ街道である。

バスは、ロマンチック街道を南下し、ディンケルスビュール市に着いた。人口は1万人ほどのようだが、町の真ん中にある「聖ゲオルク教会」の建物の大きさと、塔の高さには驚かされた。説明によると100年ほど前から、市民運動により建物の外観を保全する規制が行われ、屋根の色や勾配の規制、建物外壁のクリーニングなど、市民は建物と町並みを保全するために、毎年多額の予算をつぎ込んでいるとのこと、このような努力には本当に感心させられた。

お昼頃、前フュッセン市長ヴェンゲルト氏が市長を務めるロマンチック街道最大の都市であり、バイエルン州の首都であるアウグスブルグ市に着いた。バスから降りて、マクシミリアン通りを歩いていくと、やがて市庁舎前の広場に着いた。そこでは市民がのんびりと路上カフェで日光を楽しんでいた。私たちは、直ちに華麗なルネサンス様式の市庁舎を訪問した。玄関でアウグスブルグ市の副市長さんと文化観光局長さんの出迎えを受け、思わず息をのむ美しさの「黄金の間」に通された。雄大にして荘厳な内部を彩る絵画や天井画の神々しいまでの迫力、そのスケールの大きさ、巧みな設計に度肝を抜かれた。会見で副市長さんから歓迎の言葉とアウグスブルグ市の歴史を伺った。(ヴェンゲルト市長さんは同市の日本の姉妹都市である尼崎市との交歓会で出張中)。全員にワインが注がれ、アウグスブルグ市の記念パッチのプレゼントをいただき、沼田氏からは、星野巳喜雄市町の挨拶、迦葉山の天狗の面などを記念に贈呈し、和やかな雰囲気の中で無事、表敬訪問が終了した。

アウグスブルグの街は、2000年以上も前にローマ人たちにより築かれ、そしてルネサンス時代に入り、ヨーロッパの経済首都として繁栄期を迎えた時期に、街は創り上げられたようだ。ローマ時代、そしてルネサンス・ロココの美と宝が巨大な野外博物館になっているように感じられた。

アウグスブルグ市をあとにして、さらにロマンチック街道を南下し、ついに沼田市の姉妹都市フュッセン市に入った。フュッセン市は、ドイツの南部にあり、人口は1万4千人余り、オーストリア国境と接し、アルプスを望む、ドイツ・ロマンチック街道の終点の町である。夕方5時頃、フュッセン市で2日間の宿泊場所となる「ユーロパーク・ホテル・インターナショナル」(姉妹都市締結の橋渡し役を務めてくださったヴィルヘルム・シュヴェツェ氏が経営)に到着した。バスから降りると、フュッセンの風は肌に冷たく、日本の初冬を思わせるものであったが、700年の歴史を誇る静かなたたずまいが感じられ、アルプスに近い厳しい自然との闘いの中でしっかり根をおろしたことが感じられる街であった。

チェックインの後、フュッセン市のアレンジによるディナーに出席するため、市内の伝統的なレストラン「クロ

一ネ)に、バスで出掛けた。市内には夜のとぼりが降り、建物は下からの照明により浮き上がって見え、道路の街灯もその下だけを照らし、余分な明かりが他へ影響しないように配慮されていて、日本では味わえない独特な雰囲気をかもし出していた。レストランの玄関で、クリスチャン・ガングル市長ご夫妻の出迎え、休む間もなくガングル市長の歓迎の挨拶、星野巳喜雄市長・西田治司国際交流協会長の答礼の挨拶で晩餐会が始まった。フュッセン市の心づくしによる陽気な音楽に耳を傾けながら、ビュッフェスタイルのおいしいバイエルン風のディナーに時の経つのも忘れ、全員がこの一時を堪能した。ホテルに戻り、寝たのは12時をまわっていた。

◆10月18日(火) フュッセン

午前6時に起床し、朝食の後、8時にホテルの玄関まで迎えに来てくださったフュッセン市観光局の職員の方々の案内により、徒歩でフュッセン市庁舎まで行き、西田治司国際交流協会長(前沼田市長)が同市役所に寄贈された沼田市出身の彫刻家、桑原巨守の作品「野の花」のブロンズ像の除幕を行った。ガングル市長から、「野の花を抱くこのかわいい乙女にとってここがわが家になりますように、また立派に成長できますように、フュッセン市民みんなで末永く大切にしていきたい」という、心のこもったありがたい挨拶があった。私は、正に「この乙女は特等席につけた」と思った。

その後、700年の歴史を誇る中世の町フュッセン市の散策となった。まず、市庁舎隣の市民の多くが訪れる銀行の展示室にいき、沼田市から贈った沼田市小中学生の最新の絵画42点を、多くのフュッセン市民とともに鑑賞した(以前、私の現職の時にも同様に小中学生の絵画150点ほど贈っている)。続いて、中世の修道院の跡で、現在、市庁舎として利用されている建物への案内を受けた。建物の造りもさることながら、家具、絵画などの調度品、天井や壁などの彫刻、どれも昔のままの姿で保存され、現在も利用されているとのこと、ここでもドイツの素晴らしい国民性を知らされた。

昼食は、フュッセン市観光局の建物の中で、観光局のスタッフの方々による手作りのバイエルン風ホワイトソーゼージ(ヴァイスヴルスト)がふるまわれた。なお、今回のフュッセン市訪問の一連の催しに対して、フュッセン新聞の記者が日本からの使節団のことを報道したいとのことと常に同席し、取材していた(翌10月19日付の記事となり、全員が同新聞をいただくところとなった)。

午後は、バスで「ノイシュヴァンシュタイン城」へ向かった。車窓からの、バロック様式の教会の塔、細い路地、高い切り妻、郷愁をそそる街角、雄大な山脈とゆるやかな丘陵など、フュッセン市の豊かな文化と壮大な景色との混在は、本当に比類のない物に感じられた。4kmほど走ると、山の中腹の切り立った崖の上に城が見えてきた。アルプスの麓に建つこの城は、ルートヴィヒ2世が、1869年から1886年までの17年間の歳月をかけて建てた城で、彼はこの世の城の中で、最も美しい城にしたいとの願いを込めて建てさせたそうである。バスを降りて徒歩で山道をいくと、白鳥城の異名を持つこの城が、その名の通り、日の光を受けて、白い姿をくっきりと浮かび上がらせているのが見えた。眼下には、点在する湖が、緑の絨毯を敷き詰めたような牧草地の先に映り、遠くの山々と調和した眺めは、本当に御伽の国を思わせるような素晴らしい景観で、夢中でシャッターを切り、互いに記念の写真を撮りあった。豊かな自然を残しつつ、世界に誇る自国文化を守っているこのドイツの努力には、ただただ頭の下がる思いがした。城内は、各部屋に、英語と日本語の説明用のテープがセットされていて、係員の指示に従って見学した。続いて、数百m山道を下ったところにある、ルートヴィヒ2世が育ったという「ホーエンシュヴァンガウ城」を見学し、バスでホテルに戻った。

夕方からは、いよいよ「姉妹都市締結10周年記念式典」である。星野巳喜雄沼田市長・星野佐善太沼田市議会議長と、ガングルフュッセン市長との公式会談は、前日午後、市長室にて実施された。会談では、2月13日の白沢・利根村との合併報告や両市の今後の友好関係にはじまり、地方自治制度、財政問題、少子高齢化問題、行財政改革、議会制度と、様々な議題について活発な意見交換を行い、特に、次の3点が確認された。①今後とも、両市のさらなる友好関係を促進する。②民間交流を推進する。③次代を担う子供達の交流を推進する。

記念式典は、十年前調印式が行われた市庁舎(中世の建物・セントマング修道院君主の間フルステンザール)で行われた。まず、訪問団は庁舎前広場でアルプホルンバンドによる歓迎を受けたあと、フュッセン市関係者(およそ60名)とともにフルステンザールに通され、記念式典に臨んだ。フュッセン市音楽学校の生徒によるバイオリンとピアノの演奏で始まった式典では、両市町の挨拶の後、同市の友好関係を将来にわたり継続させるという公文書が書かれた「黄金の本」に市長、議長をはじめ、訪問団全員が署名をした。ガングル市長から直接に、フュッセン市のカレンダーと記念バッチのプレゼントをいただき、沼田市からは、迦葉山の天狗面と、沼田市鍛冶町の田村實伝師作の瑠璃観音菩薩像(「この仏像がフュッセン市に幸運をもたらしますように」の願いを込めて)を記念に贈呈した。

式典終了後、会場をノイシュヴァンシュタイン城近くの湖畔にあるホテルに移して、レセプションが始まった。私たちは、アコーディオンとギターとが奏でる弾むような明るい演奏に迎えられ会場に入った。二人はバイエルン地方の落ち着いた民族衣装をまとい、スマートな帽子をかぶって、にこやかな笑顔で私たちを迎えてくれた。飾られたお花といい、舞台の背景といいフュッセン市の心づくし、それはそれは素晴らしいものであった。

言葉ができないためにとまどうこともあったが、身振り、手振り、表情で、楽しみ・説明しあった。おかしいやら恥ずかしいやら、失敗もたくさんあった。また、こちらのブローケン英語・独語に対しても、フュッセンの皆様は親切な心を持って誠実に対応してくださった。さらに、わが町・わが国土に誇りを持ち、自分の人生観に自信を持

って暮らしておられる様子を伺うことができ、大いに感動させられた。お互いのわかろうとする努力、盛り上げようとする努力によって、素晴らしいレセプションとなった。ここでは言葉は、通じなくて、心は通じ合うものということが体験できた。

訪問団全員による合唱（「野ばら」・「別れ」）、鈴木いつ子さんの「沼田の歌」の舞踊、中井龍三さんの「さくらさくら」の尺八などが披露され、3時間以上に及ぶ宴会も、星野巳喜雄市長のお礼の言葉で閉会となった。部屋には戻ったが、このような歓待を受けた感動で、ベッドについたのは午前1時を過ぎていた。

◆10月19日(水) フェッセン〜ザルツブルグ

午前6時起床、7時朝食、8時に、ガンゲル市長、ホテルのオーナー・シュヴェツケ氏の見送りを受け、「またね」と再会を約束しながら、バスはオーストリアのザルツブルグへ向けて出発した。公式訪問を交えたドイツロマンチック街道の旅も、事故もなく無事に終わり、これからはある意味でのプライベートな旅となった。

バスは、目的地にむけてひたすら走った。やがてザルツブルグの街に近づくと、塔や円蓋のあるゴシック・バロック様式の教会、カラフルで斜めに傾斜した屋根の中世からの家並み、そして、町のシンボルともいえる「ホーエンザルツブルグ城塞」が見えてきた。

町のレストランでワイン・ビールを飲みながらの昼食の後、ザルツブルグで最も美しい広場といわれる「アルター・マルクト広場」に行った。中央には、聖フロリアン像の立つ噴水があり、コレギエン教会の向かい側に青空市場が開かれていた。商人たちは、自分の持ち場の屋台に様々な品を並べ、売っていた。アーケードを通り抜けようとする、きれいに飾られた花壇、柱、階段、アーチ、商店、碑文、レリーフなどに、ふと目を止められ、何度も立ち止まってしまった。ゲトライデ通りに出て、すぐ目に入ったのは、商店、ホテル、作業場などの「鉄看板」で、芸術性と巧妙さを互いに競い合っているかのようなようであった。通りの家は、幅は狭いが、その代わり奥行きがあった。特に魅力的なのは、建物の1階につくられたアーケードで、他の通りに抜けられるようになっていた。ほとんどの家が、上の階になるほど窓が小さくなっており、美しい門があり、いろいろな装飾がなされていた。

ゲトライデ通りの一角にある、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの生家を訪れた。モーツァルトは、18世紀を代表する音楽家で、彼はわずか35年の生涯に交響曲やオペラなど六百曲以上の作品を残している。フロアーには、モーツァルトが幼少時に使用していたバイオリン、ハンマークラヴィアなどが展示されていた。1756年1月27日、このゲトライデ通り9番地でモーツァルトは生まれたのである。時代を越えた最も偉大といっている天才音楽家をザルツブルグは生んだのである。現在のザルツブルグを、ヨーロッパで最も観光客の多い町にしたのは、昨年夏に開催されている音楽祭であるかもしれない。モーツァルトは今では、ザルツブルグのチョコレートのお菓子になり、町の至るところで売られていた。私も「モーツァルト・クーゲル」と呼ばれる、中にマジパンやヌガークリームの入ったチョコレートと、「モーツァルト・ターラー」（メダル状のもの）を求めた。

ザルツァッハ川の右岸に行き、素晴らしい庭園を持つ、「ミラベル宮殿」を訪れた。庭園には、バロック時代の典型とされる動的でダイナミックな様式の彫像があり、芸術的に配置された数々の花にうっとりさせられ、庭園から見える旧市街の教会の塔や要塞ホーエンザルツブルグ城の眺めとともに、完璧な美しさをかもしだしていた。午後5時頃、オーストリアでの一日目の宿泊所である「クラウン・プラザ・ホテル・ザルツブルグ・ザ・ピッター」に着いた。

夕食後は、ミラベル宮殿内の広間で開催されたコンサートに出かけ、地元の方々とともにモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」他3曲を楽しんできた。この演奏会場の広間へ向かうキューピッド像のある階段が印象深く、奥には婚礼の広間もあり、世界中からここで結婚式をあげるカップルがやってくるということであった。なお新婚がこの階段のキューピットに手を置くと、子宝に恵まれるというお話も聞かせていただいた。

◆10月20日(木) ザルツブルグ〜ウィーン

7時に朝食をとり、バスは8時にウィーンに向けホテルを出発した。1時間ほど走ると、やがて「ザルツカンマーグート」にさしかかった。1500~2000m級の山々に抱かれた高原のなかに、たくさんの湖がまるで宝石のようにちりばめられていた。この素晴らしい絶景は映画「サウンド・オブ・ミュージック」でも紹介され、多くの人々の心に今も残っているところである。中でもフッシュル湖は、ふくいくとした樹々に囲まれ、小さく静かで、湖水の美しさは抜群であった。ゆったりと流れる時間に身を任せて、いつまでも立ち止まっていたい、そんな衝動にかられてしまう湖であった。また、サンクト・ヴォルフガング湖、その湖畔にあるサンクト・ギルゲンの村では、モーツァルト一家の歴史が発見できた。ここでは彼の祖父が働き、母が生まれ、姉のナンネルは結婚後、ここに住み着いたということだ。

午後1時頃ようやくウィーンに着いた。ウィーンは、オーストリア共和国の首都であり、宮廷文化が今も華麗に息づく古都で、環状道路から円形に広がる街には、公園、国会議事堂、市庁舎、大学、劇場、博物館、王宮と様々な時代様式の建築が立ち並んでいた。2006年は、天才作曲家モーツァルトが生まれてからちょうど250年、彼の活躍の舞台となったウィーンでは、記念の年を祝うプログラムや特別な催事がめじろ押しだという。

昼食を済ませ、世界遺産「シェーンブルン宮殿」の見学となった。ここはハプスブルク家の夏の宮殿であったところで、マリア・テレジア・イエローと呼ばれる黄色で彩られた概観が美しく印象的であった。ロココ様式で統一された内部には、1400もの部屋があるという。そのうちの40室ほどが公開されているということなので、そのい

くつかを見学した。モーツァルトが6歳の時、このシェーンブルン宮殿に招かれて演奏したのは有名な話。その時、幼い彼は宮殿内で転んでしまった。それを助けてくれた、二カ月だけ生まれの早いマリー・アントワネットに「結婚してください」と、いったというエピソードも伝わっている。その6歳のモーツァルトが御前演奏したという「鏡の間」、そして、ウィーン会議の際に舞踏会場として使用されたという「大広間」は特に素晴しかった。ウィーンっ子の憩いの場となっているという宮殿の後方にある庭園は、広さが1.7km²もあるということで、花壇と並木道が幾何学模様となっており、優雅で実に美しかった。庭園内には、動物園、絵ガラス張りの大温室、ネプチューンの噴水などもあった。庭園の向こうに見える小高い丘には、ギリシャ風の神殿が建っていた。1961年には、ケネディー・フルシチョフ首脳会談がこの宮殿で行われたという。ドイツでもそうであったが、ここでも宮殿の保護体制、とりわけ宮殿の公開活用と同時に、伝統的建造物に対する保護策には本当に感心させられた。

バスの中から、ウィーンのシンボルと呼ばれている「シュテファン寺院」(モーツァルトの結婚式と葬儀が行われた所)、世界中からファンでにぎわうという「ウィーン国立歌劇場」(ここでモーツァルトの生誕250年を記念して、「魔笛」など代表的な四作品が上演される予定という)などを見ながら、午後5時半頃、宿泊する「ルネサンス・ウィーン・ホテル」に着いた。

◆10月21日(金) ウィーン～フランクフルト

今日は、いよいよウィーンを、そしてフランクフルトを離れる日である。ゆっくりした朝食の後、9時半にバスでホテルを出発した。2時間ほど小雨模様の「ウィーンの森」を散策した後、市内の戻り、市庁舎に入った。市庁舎は、荘厳なネオゴシック様式の建物で、中央にそびえる高さ98mの塔の先端には、「市庁舎の男」と呼ばれるシンボルが立っていた。高さが3mを越える像であるというが、小さく見えた。地下食堂に下りて、美しい女性の奏でるハーブの演奏を聴きながら、ワインやビールを注文し、時間をかけてウィーンでの最後の食事を楽しんだ。

ホテルに戻り、帰国準備のため、荷物をまとめ、午後2時半にチェックアウトして、ウィーン空港へ向かった。出国手続きを済ませて、午後5時オーストリアを後にした。そしてフランクフルト空港でJL408便に乗り継ぎ、午後9時5分、日本に向かった。成田空港着は、22日の午後3時20分の予定ということである。機内食をいただく、夜間のフライトということもあって、ほとんどの方がすぐ眠りについた。私はしばらくの間、中世ヨーロッパの町並みが今なお美しく残るドイツ・オーストリアの素晴らしさに浸っていた。

◆10月22日(土) ～成田～沼田

日が昇り、眠りから覚めると、コーヒーのよい香りが漂い、機内サービスがはじまり、朝食を済ませ、一息入れながら時計を日本時間にセットした。JLは、予定の時間通り、成田空港へ到着した。直ちに入国手続きを済ませ、無事に帰国できたことを各自がそれぞれの家庭に携帯電話で連絡した。荷物を運び、待機していたバスに乗り込み、沼田に向かった。交流団員の表情は、誰も成就感にあふれており、いかにこの旅の成果が大きかったかを物語っていた。途中のサービスエリアでは、それぞれうどんやそばを競って注文し、一週間ぶりの日本食を味わった。

沼田までのバスの中で、一人一人がこの旅の感想を述べるようになった。旅の企画に感謝した方、参加できたことに喜びを感じた方、また、日本とドイツ・オーストリアとの文化の違いやそれぞれにはよさがあることをあらためて感じた方など、多くが話された。

外側からだけの観察や印象では、なかなか実態はわからないかもしれないが、それでも私は今回、ドイツ・オーストリアへの旅の機会を与えていただき、それぞれの国の風土の違いが国民性や歴史に微妙に影を落としていることを、自分の目であらためて確認することができた。また日本のよさや沼田市のよさを見直す機会ともなった。そして沼田市で幸せに生活できていることに感謝し、わが沼田市を誇りに思い、毎日毎日を自信を持って暮らしていきたいとも思った。たくさん素晴らしい思い出をのせて、バスは午後9時頃、沼田市役所に到着し、8日間の旅行が終了した。

最後に、お世話になった星野巴喜雄沼田市長、星野佐善太沼田市議会議長、西田治司沼田市国際交流協会会長、以下団員、通訳の方々、そして、このような旅の機会を与えてくださった関係者各位に対して深くお礼申し上げる。



沼田市よりドイツ姉妹都市フュッセン市へ
桑原巨守作「野の花」のブロンズ像を寄贈
(左から通訳、ガングル市長、西田会長、星野市長)

ベートルから愛を込めて ～絵画展 富弘美術館～

ぐんま日独協会 副会長 對馬 良一

障害のある芸術家たちの絵画展が全国7ヶ所の2番目会場として、3月18日から4月1日の2週間わたり東村の富弘美術館で開催された。最初の絵画展の開会式は3月6日東京ギャラリーパレスで開かれ、この日はベートルの創始者フリートリッヒ・フォン・ボーデルシュヴィングの生誕175周年の日でもありました。当日は、美智子皇后陛下のご臨席を賜り、シュミーゲロー駐日ドイツ大使、ベートル施設関係者など出席のもと盛大に開会された。

陛下は予定時間を超過されての観覧でした。入館前の歓迎セレモニーでは、次回開催地として群馬県富弘美術館を紹介され、皇后陛下より、平形会長、星野村長、そして私に「富弘さんお元気ですか…宜しくお伝え下さい。」とのお言葉を頂き感激でした。

群馬会場を選ぶのに大変苦労しました。県立美術館、市町村の福祉施設等を考えましたが、集客数、設備、保安の面から断念し、富弘美術館に的を絞り、訪問、説明、打ち合わせする事5～6回、はじめは相手にされなかったのですが、同じ身障者である、富弘さんの決断で決定したと聞きました。ベートルとは、ヘブライ語で（神の家）の意で、第二次世界大戦中、障害者を安楽死させようとした、ヒトラーの命令を敢然と拒否し一人の犠牲者も出さなかった。ボーデルシュヴィング牧師は、「あなたは世界のクリスチャンを敵にするのですか!」と1939年9月15日のニュールンベルク法の純潔保護法、「不治の病をもてる者は、安楽死が与えられる」の条項から障害者を守ったことで知られている。

私も2001年9月にこのベートル内のリンデンホー

フに泊まったことがある。それまでは、ベートルの事についての知識はゼロでした。広い敷地内で車椅子の人や障害者と分かる人々が「こんにちは」と声を掛けてくれる。ベートルには、塀も、鉄の扉も見張りもない、解放された楽園のようでした。先日、絵画展のポスターを貼って頂くため10箇所以上の施設を訪ねた。玄関は自動ドアで入館できたが出る時はドアが開かない。事務の方が操作盤を操作して開けてくれた。世界の福祉施設の理想とされるベートルとは比較にならない。天皇皇后陛下が1993年にベートルを訪問されている。訪問を機会に日本庭園を造る計画を知りました。デュセルドルフの日本料亭の日本庭園設備等全部がベートルに寄付され。私が泊まった時、ホテルの前の草むらに大きな石が置いてあった。ここに日本庭園を造るのだと言っていたのを思い出す。5月に独日協会総会に出席予定ですので、ベートルを訪問し日本庭園、そして今回絵画展に来日された、「芸術家の家リュツダ」館長ケンパー氏、エンゲル理事、ブルク広報担当者に会うのも楽しみである。

今度は富弘さんの詩画の展示会をドイツで開催する企画を検討中。(ドイツ側OK)

★現在ベートルには総合病院、障害者施設、高齢者介護施設、などのほか、農場、家具製造などの職業訓練場を備え、障害者ら1万3000人と医師・介護者1万2000人が住み、2564種の職種があり障害者やホームレスなどの自立を助けている。ベートルは人としての尊厳をもち、社会に対して貢献するという理念に基づいている。



【写真左から】橋本板木日独協会会長、ノイエルト日独協会副会長、星野富弘さん、ドイツからの展示説明者、對馬ぐんま日独協会副会長

☆全国日独協会連合会年次総会

— 来年4月群馬県草津温泉で開催 —

来年の4月、全国日独協会の総会が、群馬県の草津温泉で開催されることが正式に決まりました。その概要は次の通りです。

今後役員会〔準備委員会〕等で検討していくこととなりますが、皆様のご協力を宜しくお願い致します。

記

月 日／平成19年4月24日(火)・25日(水)・26日(木) 2泊3日
 場 所／群馬県草津温泉 ホテル中沢ヴィレッジを中心に
 主 催／全国日独協会連合会
 主 管／ぐんま日独協会
 後 援／駐日ドイツ大使館、日独協会、群馬県、草津町、他

<日程概要>

- 24日▶現地集合 前夜祭
- 25日▶セレモニー、総会、観光、レセプション
- 26日▶観光、帰路
 …途中、高崎少林山達磨寺洗心亭…

<参加者予測>

- 全国日独協会役員▶約80名
- ぐんま日独協会会員▶約30名
- ドイツからのお客様▶約30名
- 計▶140名

<会費・経費等 今後検討>

以 上

☆日本におけるドイツ年記念

— 『ドイツフェスティバル in ぐんま』で芳志明細 —

(順不同・敬称略)

次の方々からご芳志をいただきました。

- 5万円 平形義人
- 3万円 西片 守、平形CLC
- 2万円 黒田とめ子、川島孝一、高橋徳光
- 1万円 後藤 敦(山本一太)、田所浪子、豊泉伊三男
 山田章之、鈴木克彬・和子、田中彦彦、小暮今朝光
 川田正彦・正江、井口 實・リウ子、久保 洋・健二
 鹿山徳男、少林山達磨寺、塚越平人、森 喜一
 白倉卓夫、平形明人、小林 喬、藤生悦子、深澤厚吉
 北爪和男、橋本 孝(栃木日独)
- 5千円 須田 一、太田美つ子、堀口靖之、小成田文郎
 代田和年、小林和男、五十嵐博、古沢豪彦郎
 湯浅公子、杉本俊六、佐藤政行、伊藤廉平、三井 聡
 八木文夫、船曳 甫、入澤 肇、吉川まゆみ
 根岸屋寿子、木暮澤子、島田卓爾、鈴木芳平
 鈴木喜代、塚越小枝、杉内 沙、磯野博明、角田静恵
 対馬良一、富所敏浩、前田 勇、五十嵐努、上野道昭
 折田謙一郎(小淵優子)、青木京子、樋口次男
 沢井修子、黒澤・ギセラ・マリア、鈴木剛一郎
 古屋雅雄、木暮幸子、池端ちあき、渡川ミドリ
 阿久澤達子、中澤正尉、小口文子、松下照明
 田口久美子、新井三知夫、井上敏子、亀井民雄
 高木政夫(前橋市長)、宮川清吾、森田 均、曾我隆一
 大川 章、都丸美智子、佐塚 操、峯岸正典
 中島康代、黒田桂子、豊泉珠江、富所民江

以上86点 厚くお礼申し上げます

ぐんま日独協会 会長 平形義人

☆上毛新聞オピニオン21・視点欄

— 鈴木事務局長が執筆 —

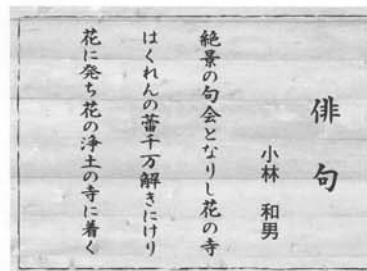
現在、上毛新聞のオピニオン21の視点欄に、鈴木事務局長が執筆中です。その掲載月日及びテーマは次の通りです。ご一読ください。

- 17年12月20日 ごみ問題
- 18年 1月30日 森林環境の危機
- 18年 3月16日 石門心学
- 18年 4月30日 W杯サッカーと環境
- 18年 6月12日 グローバル社会
- 18年 8月 1日 欧州のデポジット制度
- 9～10月ころ ドイツの交通事情

上記の内容は、すべてインターネットの次のアドレス〔www.raijin.com〕で見ることが出来ます。

【新会員募集中】

年会費法人¥10,000 個人¥3,000 家族¥500
 希望者は下記へご連絡下さい。
 〒377-0007 渋川市石原966 母心堂 平形眼科方
 TEL.0279-22-0149 FAX.0279-24-6867



訃報

当協会常務理事、久保洋さん(沼田市)が逝去されました。
 久保さん(医師)はカメラがお得意で、数々のスナップを撮られハイマートにも掲載させていただきました。ご冥福をお祈りします。

◇原稿ご案内◇

日独交流につながるご感想・情報・会員消息・作品を住所・氏名・職業・年齢・電話番号明記の上、お寄せ下さい。紙面の都合で編集部で手直しさせていただくことがあります。(800字以内) 編集責任者 (川島孝一)